追悼　訓覇曄雄先生

村山保史

二〇二〇年七月四日に、大谷大学名誉教授であった訓覇曄雄先生が逝去された。八十五歳であった。二〇〇〇年三月のご定年の後も、常に大谷大学のことを、哲学科のことを気にかけておられた。

先生の学問的な業績や大学での仕事について客観的な立場から総括できるような力は私にはない。この一文を、訓覇先生の下で哲学を学んだ者としてわずかに一学生の立場から、時に個人的な心情を交えながら恩師をしのぶ縁（よすが）とすることをお許しいただきたい。

信雄氏と二人の師

先生は一九三四年に三重県菰野町の真宗寺院の家にお生まれになった。父は真宗大谷派の元宗務総長で、大谷大学の学監も務めた訓覇信雄氏である。氏は一九四八年に曽我量深、安田理深らとともに真人社を結成し、一九五六年の「宗門各位に告ぐ」（宗門白書）では清沢満之とその浩々洞の活動を正式に親鸞教学として取り上げ、一九六二年には教団の本来の姿を信仰共同体（僧伽）に求める同朋会運動を提唱した。「傑僧」と呼ばれ、宗門では知らぬ人のいない信雄氏であったから、その子として生まれ、その活動を見聞きしながら思春期から青年期を過ごされたことは、先生に少なからぬ影響を与えていたであろう。

一九五三年には三重を離れて京都大学文学部に進まれ、さらに一九五七年からは同大学院文学研究科で学ばれた。自分の大学（院）時代の師として先生は三宅剛一と野田又夫の名をあげられた。三宅と野田はともに西田幾多郎に師

事したという意味では京都学派の流れに位置する哲学者であったが、同時に、典型的な京都学派の思想とは一定の距離を置いて学派を批判的に総括した学者でもあった。その傾向は三宅に強かった。

私の学生時代は、京都学派とナショナリズム、ひいては第二次大戦との関わりが云々され、厳密に根拠づけられたことのみを言うのが真の哲学であり、大言壮語は最も戒められるべきものとされた。そういう学問態度はかなり徹底していて、できるだけ控え目にものを言うよう厳しく訓練された。[1]

先生は京都大学における三宅の講義録（『哲学概論』弘文堂、一九七六年）の編集にかかわり、大谷大学における講義ではそれをテキストとして使用された。

実践哲学と目的論

一九五九年度に提出された先生の修士論文は「カントの実践的世界―事実としての自由の意味―」であった。博士課程ではカントの目的論に研究の範囲を広げられた。また同時に大谷専修学院にかかわり、私塾、相応学舎にも通われた。相応学舎では、以前から面識があったであろう安田理深の真宗や仏教の講義を聞かれた。先生が認識論を主たる研究課題とされることは生涯なかった。

若き先生が実践哲学（倫理学）や目的論を扱い、理論哲学としての認識論を扱われなかったことには理由があったと思われる。先生はあるとき、認識論一辺倒の研究に区切りをつけて他のテーマの研究を念頭に置いて実践哲学を研究したいと相談した私の意図に寄り添いながら、カントの認識論はおもしろくないからねという意味のことをおっしゃったことがあった。認識論は認識の構造や妥当性の分析であって、ある意味でそれだけで完結したものであるのに対し、実践哲学や目的論は政治や社会、歴史や宗教といった幅広い哲学的テーマにも繋がり、それらを考察する際の道具立てになりうるものであったからである。

相応学舎でずっと安田理深先生の真宗・仏教の講義をお聞きしていて、大学院の終わり頃には、しかし個々の問題の切り口は西洋の方がシャープというか、仏教はほとんど取り扱う術をもたない、あるいは関心がな

いようにみえました。例えば哲学は、昔から宗教にからんで、学問と宗教、理性と信仰の関係とか、国家と宗教の関係とか、さまざまな問題を取りあげてきています。それで当分は哲学を続けて問題解決の力をつけようと思いました。[2]

大学教育における師ではなかったが、先生は安田を尊敬しておられた。それは『安田文庫洋書目録 大谷大学図書館蔵 別冊』（一九八七年）に書かれた「安田理深先生と洋書」に詳しいが、先生は安田のある著作を評して「あれは歯が立たん」とおっしゃった。私は修士課程のときそんな事情は知らないままに「安田文庫」にあったカントの研究書を好んで読んでいたが、抜群の記憶力と明晰な頭脳の持ち主である先生をしてそのように語らせる人が存在したこと、自分がその人の蔵書から学んでいたことをその発言から知ったのである。ともあれ、右の引用で「当分は」とされていることには、先生が早くから、いずれ真宗や仏教の思想に学ぶつもりであったことが示されている。

一九六三年に大学院を満期退学された先生は、一九六五年に西洋文学研究室の助手兼任というかたちで大谷大学のドイツ語の専任講師として採用された。文学研究室やドイツ語と言えば意外に思われるかもしれないが、先生は若いころから文学に親しみ、演習ではドイツ語の哲学書を流暢に読み上げられた。

田舎の高校からまったく一人ぼっちで京へでてきた私は、学食で二十七円のカレーライスとか、十二円の素うどんとかを食べて教室へでる以外は、やはり一人ぼっちで図書館で小説とか文芸雑誌ばかり読んでいた。[3]

一九六六年には、はじめて活字となった先生の論文「カントの目的論―論理的合目的性と美的合目的性―」が京都大学の『哲學研究』に掲載された。これは『判断力批判』の先行研究が少なかった時代にあって、カントの目的論の生成と構造を『判断力批判』の全体にわたって考察した若き先生の労作であり、実質的には博士学位論文に相当すると言ってよいものである。そしてこの労作は、一方では、カントが残した理論哲学と実践哲学との断絶を精神の発展の目的論的な考察によって埋めようとするヘーゲルの哲学に先生を向かわせるものとなった。また他方では、大学の

構成員としての先生の方向を決めるものともなった。

英文と独文共用の西洋文学研究室というところに机を置いて勤務していたのですが、そこで実際には、前から手がけておりました「カントの目的論」という論文を書いておりまして、一年くらいして『哲學研究』に載せてもらいました。そんなことで、〔ドイツ文学の〕大庭〔米治郎〕先生と哲学の金松賢諒先生が相談されて「君はやっぱり哲学の方がいい」ということになって、二年ほどで文学科から哲学科の方へ移りました。[4]

ドイツ観念論研究者

一九七一年には助教授に昇格され、翌年には、初期ヘーゲルにおける国家観と宗教観を問う「若きヘーゲルのキリスト像」(『大谷學報』)を書かれた。文学作品のような美麗な文体で書かれた論文である。その後、「国家と宗教」という問題への関心が深まり、一九七七年には『精神現象学』を駆使してイェーナ期におけるヘーゲルの国家観を詳細に分析した先生の主要論文のひとつ「イェナ期の国家観と『精神現象学』―政治とそれをこえること―」(『大谷大學研究年報』)を書き、翌年には教授に昇格されている。一九七九年には「国家と宗教―ヘーゲルにおけるその連関の諸相―」(『大谷學報』)を書かれている。先生のドイツ観念論研究者としての地位はこの時期に定まったと言ってよい。

このように一九七〇年代の先生はドイツ観念論の文脈において国家と宗教の問題を扱われたが、七〇年代を締めくくる研究と言えるのは、一九七九年に『理想』のカント特集号に掲載された「カントの実践哲学―批判主義の政治観―」である。この論文はカントの諸著作に散見される政治思想を批判哲学体系に位置づけることにはじめて成功した試みとして、日本カント研究史における記念碑的な論文である。

先生が自らの論文について語られることはほとんどなかったが、この論文が公開されてすぐに京大時代の先輩であった観山雪陽氏から電話があり、「カントの政治哲学研究のスタンダードになりうるものであろう」との批評を受けたと話されたことがあった。観山氏はやはり一九七九年に刊行された、G・プラウスの *Erscheinung bei Kant: Ein Problem der "Kritik der reinen Vernunft"* の翻訳『認識論の根本問題―カントにおける現象概念の研究―』の共訳者となっ

た人である。先生はそのような先輩と学生時代を過ごされたのである。

宗教大学の運営

一九八〇年代以降は、一九八〇年から一九八三年にかけて学監・文学部長、一九八二年から一九八四年にかけて大学院文学研究科長、一九八八年から一九九〇年にかけて再び学監・文学部長、そして一九九四年からは学長と、次々に大学の要職に就かれている。一九七〇年代の西洋近代哲学における国家と宗教の研究を経て、実際に大谷大学という宗教大学の運営に当たられることになったのである。

理論を実践に移すと言えば言葉は簡単である。しかしそもそも宗教を基礎にした教育とはなにを意味するのだろうか。それは先生自身が長く抱いた問いでもあったようである。一九八〇年四月、四十五歳の先生が文学部長として新入生に語りかけた文章が残っている。

> 最後にどうしても言っておかねばならず、また言っておきたくもあることが一つある。しかしいま言っても、おそらく諸君には理解できないであろうし、それに私も、三十年の粒々辛苦の思いをそう易々と人に喋りたいとも思わない。しかしとにかく考えてもらいたい事柄は、大谷大学は真宗仏教たる宗教を、その教育と研究の基礎においているということ、そのことの意義である。[5]

「三十年の粒々辛苦の思い」を私たちが共有することはできない。おそらくそれは先生の生い立ちも加味して形づくられた先生だけのものであろう。ここで先生が学生に求められたのはただ大谷大学での学びの意味を問うことのみである。しかし先生自身には、大学運営に携わる者として宗教教育を具体的に実現し、学生に提供していく必要があった。

先生がかかわられたのは一九八一年六月の真宗総合研究所竣工、一九八二年十月の博綜館竣工等を過程として進められた「博綜館構想」である。それはいわゆる「総合化」の動きであり、総じて言えば、現代的な学問研究にある「特殊専門化、多様化、そこから生ずるそれぞれの学問領域のエゴイスティックな自己目的化、聖域化」[6]を否定する動きであり、大谷大学が抱えてきた問題に照らし合わせれば、

一九六〇年代の学園紛争を通じても明らかになった「大谷大学の二つの動輪である学問と宗教が、それぞれに自らを自明のものと決めこんで、相互批判の関係に立つという本来の緊張関係を喪っていた」[7]状況を打破する動きであった。そしてその構想はこの総合の支点が人間であり、「二つの動輪」がもとづくのは生きた生身の人間であることを再確認したものであった。一九九四年から二〇〇〇年にかけて学長として先生が実現されたことはその方向性の継承であり、補完であり、強化であったと思われる。先生は学長として大谷大学がいかなる学場であるかを問われた。大谷大学が宗教を基礎として人間教育をする宗教大学であり、国家のためにある官立大学なのではなく学生一人一人の人間的完成ないし自己確立のためにある私立の大学であることを、清沢満之の「開校の辞」に遡って学生に繰り返し伝えられた。

一八七〇年代に研究テーマとされた「国家と宗教」という大きな問題設定は、右のような一九八〇年代以降の公務のなかで、「政教分離」や「宗教と教育」の問題へと具体化していき、総じて「知と信」という問題に集約されていったように思われる。一九八一年に『倫理学とはなにか―その歴史と可能性―』（勁草書房）を編集し、「批判と形而上学―「超越論的弁証論」の意味―」を『理想』に掲載されてからは、一九八四年には「知と信―カントの場合とヘーゲルの場合―」（『哲學論集』）を書かれ、一九八八年には近代から現代にいたる西洋哲学、さらには仏教における唯識理論、親鸞の思想までを射程とする主要論文のひとつ「現代における知と信」を『新・岩波講座哲学』に掲載されている。博士課程時代に「当分は哲学を続けて」として封じておかれた仏教思想からの学びを公にすることを自分に許されたのである。先生が最後に書かれた二〇一八年の論文「国家と宗教―政教分離をめぐって―」（『信と知』）には、国家と宗教（親鸞の浄土思想を含む）についての節度あるカンティアン（Kantian）の立場からの先生の最終的な見解がまとめられている。

哲学科教師

哲学科の教師としての先生はどのような方であっただろうか。

私が先生の授業をはじめて受けたのは近世哲学の講義である。それは学部二年生の私には難解であった。思想の内容以前に用語の意味がわからないのである。電子辞書も、

検索をかける携帯もなかったころの話である。質問をしようにも、なにがどうわからないのかもわからず、質問をするための疑問文がつくれなかった。それは同級生たちも同様であった。当時の教室では、大げさに言えば教卓と学生机のあいだには踏み越えられない一線が引かれており、先生の御座（おわ）す聖域が簡単に世俗化されることはなかったのである。私が講義を受ける数年前に、先生は自戒の意味も込めて、新入生に向かって次のように話しかけておられる。

> いまは小学から高校まで、教師と生徒の関係は友人のそれであることが理想らしい。私の大学教師たちは、これは断固としてそうでなかった。そして私たちは彼らに真理の面影をみいだし、またそのつど私たちがその真理からいかに隔てられているかという思いに臍を噛んだのである。……教師とは、自分が真理なのではないが、真理は自分の背後にあって、諸君にあるのではないことを理解さすべく虚像を演じている者の謂であろう。[8]

授業の敷居の高さは三年生から四年生にかけての演習（ゼミ）でも変わらなかった。いや演習の場合はテキストがカントの *Kritik der reinen Vernunft* であったから、状況はさらに困難を極めた。ゼミ生たちは四苦八苦してカントの文体と格闘したのである。とはいえ継続は力なりで、苦労して読んでいくうちに四年生の半ばごろにはカントにも慣れ、その批判哲学――限度を弁え、なにものであろうと理性による自己吟味を拒否するものの権限を認めず、なにものであろうと自己吟味を経たものの尊厳を否定しない――の精神もおおよそ理解できた。

四年生の演習では印象に残った出来事があった。ちょっと哲学かぶれしたゼミ生が一人いて、カント哲学における自体存在の意味を図にして大哲学者風に解明しようとする内容の発表をした。発表が終わって、飲み会のときだったと思うが、私は先生に「あの発表、おかしかったですよね？」と尋ねた。いや、やっかみ半分に賛同を求めた。できれば思い上がったゼミ生をシニカルな調子で叱って欲しいとさえ願っていた。しかし、てっきり同意してもらえるかと思えば、先生はきっぱりと「いや、あの発表はおもしろい。内側〔自我の側〕に自体存在を認めていた。それがいい」とおっしゃった。教壇では近寄りがたいとだけ見えたこの

方は、年若く、自分からすれば無知と言ってよいほどの者の発言といえども、その見かけに流されることなく内容の妥当性を認められたのである。

右に述べたことは個人的な思いであるが、先生は多くの学生にはどのように映っていただろうか。茶目っ気というか、いたずらっぽさというか、独特の人なつっこさがあるということがそのひとつであったろう。あるとき、飲み会の帰りにみなで千鳥足で歩いていると派手なエンジン音がして、前輪が持ち上がったバイク（いわゆるウィリー状態）に乗って電柱にぶつかりそうになっている酔っ払いがいた。驚いて見ると、いっしょに歩いていたはずの先生であった。なぜ乗ろうとしたのかわからないが、学生が押していたバイクを取り上げてそのような状態になっていたのである。そして倒れそうなバイクにまたがった先生は言った。「△△（バイクの持ち主）、このバイク壊れとるわ」。もちろんバイクが悪いのではなく先生が悪いのである。このお世辞にも倫理的とは言えない行動は、ちょうどよい加減に教壇での授業とのギャップとなって学生たちの共感を呼んだ。そう、「虚像」はともあれ、もともと先生はそういう人なのである。

もうひとつは細やかな気づかいの人ということであった。当時、哲学科の西洋哲学分野は訓覇ゼミと箕浦（恵了）ゼミに分かれていたが、軽薄な学生たちのあいだでは面倒見のよい訓覇ゼミ、厳しい箕浦ゼミという噂がまことしやかに流れていた（念のために申しあげておくが、箕浦先生が面倒見の悪い先生だったなどということは微塵もない。むしろ事実はその逆である）。実際、出来が悪く手間のかかる学生を自認していた私もその噂話に賭けて訓覇ゼミを選んだ。

なるほど先生はいつも学生を気にかけておられた。後には、修士課程を修了して勝手に他大学院の博士課程に出て行った私を心配し、わざわざ参考文献を伝える電話をくださった。私が学内広報誌に大谷大学との出会いについて文章を書いたときも、はじめて曽我量深について拙い論文を書いたときも、おもしろく読んだ、よく書けていたと電話をくださった。先生のこの気づかいは終生変わることなく、その後も、一度覚えたことは忘れない記憶力でおそるべき数の人のことを心配しておられた。私は先生に会う度に多くの人の現状を説明せねばならなかった。

よき仲間とともに

同じ哲学科の同僚からみた先生はどのように映っていたであろうか。

先生が最もうれしそうな顔をされたのは哲学科の同僚たちと一緒にいるときであった。そんなときの先生はパッと花が咲いたようであった。「哲学科がなければ大学を辞めていた」とおっしゃったことがあった。自ら選んで大学に迎えられた同僚たちを尊重し愛しておられた。選ばれたのはいずれ劣らぬ秀才たちであり個性派揃いであったが、みなが先生を尊敬していた。それは先生がその個性を知り、哲学科におけるその位置、適所を認めていたからではなかったか。訓覇先生、そして幼なじみでもあった箕浦先生を中心とする哲学科という全体のなかで哲学科教員は安んじて教育研究を進めることができた。その雰囲気はおのずと学生たちにも伝わっていた。哲学科は訓覇先生を中心として哲学する者たちの、いわばゆるやかな共同体を成していたのである。その哲学科のみなが集う場が、博綜館構想によってつくられた四群六層の博綜館研究室のひとつの第二研究室であった。そして哲学、社会学、教育学、西洋文学等の教員たちが研究を公開する場が、大谷大学哲学会の『哲學論集』であった。

哲学科には、その母体としての大学を開校した清沢満之の日本最初期の西洋哲学はもちろんのこと、西田幾多郎や朝永三十郎ら京都学派による広範な授業展開、鈴木大拙にはじまる宗教学研究、金松賢諒から本格化する古代哲学研究等のさまざまな伝統があり、それらはそれぞれに重要なものであるが、先生はそれらの伝統に劣らぬ大谷大学哲学科の新しい時代を形づくった立役者であったと言っても過言ではないであろう。

訓覇先生の退職記念の会でスピーチに立たれた箕浦先生は、訓覇先生を「メンシェンケナー」（Menschenkenner）と評された。他の人間の全体を正しく評価する人を意味するそのドイツ語のように、先生は人間に通じた方であった。そしてそれを可能にしたのは、気づかいや人なつっこさとしても現れていた先生の人間への温かな関心、人間愛によるものであったと私は思う。

晩年の闘病のことを先生は口外しないように求められた。病床を見舞うこともお許しにならなかった。もうそれほど長くないとなったとき、私はご子息の浩氏から連絡を受け、

七月二日に病床を見舞った。浩氏は電話口で「楽にさせてやってください」とおっしゃった。病床の先生はやはり明晰であった。私は先生の論文集についての見通しを話し、先生が気にしておられる人たちのこと、大学のこと、哲学科のことを話した。そして「もう心配しないでください。大学のことも哲学科のことも私に任せてください」と身のほどを弁えない言葉を伝えた。そう伝えれば先生が去って行ってしまわれることはわかっていた。そして「最後に握手していただけますか」とお願いした。両手で握手して「ありがとうございました」と告げた。かすれた声で「こちらこそ。ありがとう」とおっしゃった。部屋から出るときに振り返ったら、こちらを見ておられた。これが今生の別れになる。もう一度頭を下げてタクシーに乗った。大学ではゼミ生たちが演習を待っている。その演習の教室はかつて自分が大学院の演習を受けた教室なのである。この大学で先生の志をわずかなりと引き継ぐこと――それが、先生なきこの世界に残され、哲学科に残していただいた私の課題である。

注

1 「たまには法螺もふくがよい」『大谷大学広報』三―三、一九九一年、十一頁。以下、先生の書かれたものからの引用においては適宜、字句を改めた。また引用中の〔　〕内、傍点は引用者によるものである。

2 「大谷大学と私―よき仲間とともに―」『無盡燈』第一三二号、二〇〇九年、二頁。

3 「腐っても大学生であれ―新入生の諸君へ―」『大谷大学広報』五十五―一号、一九八〇年、三頁。

4 「大谷大学と私―よき仲間とともに―」、二頁。

5 「腐っても大学生であれ―新入生の諸君へ―」、四頁。

6 「博綜館構想の起動―総合への拠点を求めて―」『大谷大学―三二〇年史の語るもの―』、一九八七年、十二頁。

7 同右、十一頁。

8 「腐っても大学生であれ―新入生の諸君へ―」、四頁。

（むらやま　やすし・大谷大学）